

愛を知らない高嶺の花は
孤高の騎士に身請けされて
毎晩愛される

一章・高嶺の花と孤高の騎士

いかに娼婦の身上は人それぞれとはいっても、元の身分が貴族令嬢だった者は極めて珍しい。とはいえるわけではない。アルヤもその一人である。

タツサ国にある国営娼館に所属するアルヤは、元はといえば高位の貴族だった。だが生家の没落により、一生かかつても払いきれない負債を肩代わりするために、娼婦に身をやつしたのだ。アルヤのように貴族でなくとも、親の借金を負って娼館に売られてくる娘は少なくない。だからこそ誰も娼婦の素性を聞きはしないし、情事に際して名前すら尋ねない者も多かった。このため、指名の時点で知られるにもかかわらず、馴染みの客でもないかぎり、娼婦の名前は忘れられている。

だが、アルヤは違う。

『男なら一度は抱いてみたいと思うものだ』

ちまたで今まで言わしめるのが、アルヤである。彼女はそもそも、予約がいっぱいで会うことすら難しい。だというのに、その噂は彼女の名前と共に王都の男たちの間でもちきりだ。きちんと手入れのされた金の巻き毛に、同じ色のたっぷりとした長いまつ毛。その下に覗く美し

い緑の瞳は、ランプの心もとない光の下でさえきらめいて彼女をあでやかに見せる。紅をひいた唇は形がよく、艶やかに潤んでおり、いつも上品な微笑みを浮かべている。その顔だけでも並の娼婦とはほど遠い印象なのに、客から貢がれた気品のあるドレスを身に着けているおかげで、彼女は麗しい貴族の淑女のようにしか見えなかつた。

見た目だけではない。普通ならただ女を抱きに来るだけの場所に、アルヤは会話まで愉しませる。だが、ひとたび肌を露わにすれば、貴族の女にはあるまじき手練手管でどんな男も惑わせた。おかげで一夜の夢にはできないと娼館に通う男たちはため息を吐くものだ。なのに、二度目を願うにはチャンスに乏しく、何度も会うのは金持ちの貴族でなければ難しい。まさに高嶺の花である。あるいは一度会つたら虜にしてやまない魔性の娼婦とも言われている。

つまり、アルヤは娼館一の娼婦だつた。彼女の実力なら娼館という匂いがなくとも、独立して高级娼婦としてもやつていいだろう。そうすれば貴族のような暮らしだつて夢ではない。とはいえ巨額の借金があるので、彼女は娼館から出ることなどできない。アルヤは別にそれで構わなかつた。

(わたくし、どうせ『貴族のお嬢様』なんて性分じやなかつたのよね)

貴族令嬢だった頃は家に閉じこめられ、やれ刺繡だの、礼儀作法だの、日に焼けるなだの、うるさいことこのうえなかつた。さらには大して気の合わない婚約者までてがわれて、令嬢時代の彼女は辟易していたものだ。

(仕事さえこなせば、昼間に何をしていても怒られないもの。……けど。やっぱり何か物足りない

のよね)

個室を与えられているアルヤはソファに腰掛けながら、ふう、とため息を吐いて窓の外を見る。外は暗くなり始め、気の早い客が徐々にやつてくる時間だ。本来なら娼館の一階にある控室で他の娼婦たちと一緒に並び、買ってくれる男を待つ決まりである。だが、どうせアルヤは連日予約が入つてるので、自室で待機している。

待ち時間は暇とはいえ別のことをするわけにもいかず、今日は何を考えて過ごそうかと思った、そのときである。不意に、ドアがノックされた。

(あら、今日はずいぶんせつかちな方ね。がつついてるつて思われたくないで、わざと遅れてくる方が最近は多いのに)

「どうぞ、お入りになつて」

窓の外からドアの方へと目を向けなおしたアルヤは、悠然とした笑みを浮かべ、客を待つ。本来ならここで案内の者が先に入つてくるところだ。だが、開いたドアから、ぬうつと現れたのは、見知らぬ屈強な男だつた。並の男なら余裕で通れるそのドアを、彼は頭を屈めて入つてきたのだ。その瞬間、アルヤはどきりとする。

(とっても大きな方だわ)

「あつ困ります！」

「金は払つただろう、部屋まで来ればもう案内はいらない」

「旦那！」

ばたん、と大きな音をたてて案内の者を締め出すると、客の男はずんずんと大股で三歩歩いて、たつたそれだけでアルヤとの距離を詰めた。

目の前に立たれると壁もあるかのよう圧迫感を覚えるその男は、初めて見る。背が高すぎて頬と鼻の穴しか確認できないが、そもそもこんな巨大な身体の客に出会ったことがない。

(そういえば、今日はいつもの方が予約されてるんじゃなかつたかしら?)

座つた状態では見上げても顔が見えないほどに大きい男は、すつ、とその場で跪いて、アルヤに目線を合わせた。ちつとも笑っていない顔の、赤い瞳と視線が交わる。

「本来なら順番待ちをすべきところ、金を積んで今夜の貴女の時間を買った。貴女は相手がどんな男であれ、相手をしてくれる女性だと聞いたが、合っているか?」

こんな直接的にセックスのことを聞かれたのは久しぶりである。しかも尋ねる声音は固い。ぱちぱちと目を瞬かせたアルヤは、すぐにくすくすと笑つた。

「どんな噂が出回っているのかは存じませんが、わたくしは娼婦でございますよ?」

つまりは客なら拒まないという意味だ。

「だが、俺の身体は大きいだろう。それに顔にこの傷だ。相手を拒む女性が多い。受け入れたとして震えて泣き叫ぶばかりでな」

「あら……」

アルヤはそつと手を伸ばして、男の頬に触れる。ぴくん、と身体を震わせたものの、男は避けることなくアルヤの好きにさせてくれた。

ランプの灯つた部屋ではわかりづらかったが、ここまで近づけば男の顔が見てとれる。彼の言う通り、額から頬にかけて大きな傷痕があつた。しかし、きりつとした眉に涼やかな目元、引き締まつた唇もあいまつて、その傷痕が不思議と映えて彼を涼々しくかつこよく見せている。きっと彼は軍人なのだろう、短く刈りこまれたこげ茶の髪は、貴族だとしたら不格好だが彼にはよく似合つている。服に包まれていてさえ、その下の筋肉の形を想像させる身体つきに、アルヤは、ふ、と小さく息を漏らした。

(どうしたらしいの、この方……)

「こんなに雄々しくたましい方を、拒む方がいるんですの?」

すり、と傷痕をなぞつてみれば、それはすでに古傷となつてているのだろう、しつかりと塞がつた傷痕は、周りの皮膚よりなんだかつるりとしていて触り心地がいい。高揚し始める胸中をよそに、アルヤは優美な笑みを浮かべた。

「わたくしは素敵だと思いますよ」

(好みど真ん中だわ……!?)

「……っ」

両頬を包んで言えば、驚いて息を呑んだ男がアルヤを凝視する。緊張させていた身体をやがてゆるゆると解くと、ため息を吐いて、彼はアルヤの両手を自身のもので包みこんだ。

「……噂は本当のようだな。では、今から貴女を抱いて構わないな?」

(一晩あるのに、会話を愉しむ余裕はないのね。可愛らしい方)

ふふふ、と笑つて答えたアルヤを、男はエスコートする仕草で立たせる。

「あなた様のお名前をうかがつてもよろしいですか?」

ベッドに誘われる途中に——今度は先ほどの大股と違つて、アルヤに合わせて歩幅を小さくしてくれている——尋ねると、ぴた、と止まつて男はアルヤの顔をまじまじと見た。

(あ……この緊張したお顔、好きだわ)

「貴女は誰にでも……いや。名前を聞かれたのは初めてだ」

「そうなのですか? わたくし、あなた様のお名前を呼びながら……」

なぜかそこで止まつて、アルヤは緊張する。

「抱かれ、たいです……」

(やだ……初めてでもないのに、どきどきしてきた)

かあ、と頬を赤らめたのをどう思つたのだろう、男はまだアルヤの顔をじいっと見つめていたが、おもむろに彼女の指先に口づけた。それは貴族らしい挨拶のようでいて、もつと親愛が籠つたような仕草だった。

「俺はエーギルだ。俺にも、貴女の名前を教えてくれ。貴女のことをなんと呼べばいい?」

じつとアルヤを見つめる赤い瞳は、先ほどにも増して熱を帯びている。それは男が女を求めているときに見せる、情欲の炎を灯した目だ。

(案内の者に聞いているはずなのに、わざわざ聞いてくださるのね)

「アルヤとお呼びください。エーギル様」

「ああ、アルヤ。いい名前だ」

目を細めた男——エーギルは、ここで初めて笑む。

(わ……)

彼の笑顔に見惚れているうちに、エーギルの手がアルヤの頬に添えられ、顔が近づいてきた。だが、唇が触れる直前に彼は止まる。

「口づけてもいいか?」

彼も童貞ではないのに、間近でそんなことを聞かれて、アルヤも目を細めた。長身の彼が標準程度しかないアルヤに立つたまま口づけるのは、骨が折れるだろうに。

(ほんとう、可愛らしい方)

「許可なんてりませんわ」

答えながら唇をついばむと、アルヤが離す前にその口を追つて唇をはまれる。リップ音をたてて口づけをくりかえしていると、そのうちにアルヤの身体がふわっと浮きあがつた。

(あ……)

エーギルの太い腕に抱き上げられ、声を漏らしたアルヤに、彼は心配そうな顔になる。

「す、すまない。ベッドに行くのがもどかしくて……いやだつただろうか」

「いいえ、お好きになさつて」

首に腕を回せば、安心したようにエーギルはまた口づけを再開する。今度は唇を割つて入つてき

た舌に応じたところで、アルヤはどきりとする。

(エーギル様の舌、大きいわ。身体が大きいからなの?)

ちゅるちゅると舌を絡めている間に、アルヤの身体はベッドにもう移動している。そつと静かに下ろされたのに、エーギルがギシつと音をたててベッドに乗り上げたせいで、アルヤの身体がぼわんと揺れる。その揺れにくすくすと笑うと、彼は困ったような顔になつた。

「すまないな、俺は重いから」

「楽しいです」

「……では続きをする」

いちいち律儀に断つたエーギルは、アルヤのドレスのスカートをたくしあげてくる。もう秘部への愛撫をしようとしているらしい。

(あら。そんなに切羽つまつてらっしゃるの?)

ちらりとエーギルの下半身に目を向けるとズボンは形を変えて押し上げられていた。

「お待ちになつて」

そつと彼の腕に手を添えて止めるど、エーギルは眉間に皺を寄せてため息を吐いた。

「……大男に組み敷かれるのはいやかもしれないが、少しばかり」

「そうではありません。もう少し、ゆつくり^{たの}愉しみましょう?」

「^{たの}愉しむ……?」

「ええ」

太ももに添えられていた手を離したエーギルに笑んで見せて、アルヤは上半身を起こすと、彼の胸に両手を当てる。

「わたくしが脱がせてもらよいですか?」

(普段は聞かないけれど、エーギル様は確認してくださるもの。わたくしも聞かなきや)

「あ、ああ……」

「その代わり、わたくしの服も脱がせてくださいませ」

背中のリボンを示してエーギルにねだれば、彼は生唾を呑みこむ。

「……いいのか?」

「肌を合わせるのに、脱がないなんて」

膝立ちになつてエーギルに口づけ、拗ねたような声で囁くと、彼は苦笑いを浮かべた。

「どうかなさいまして?」

「いや。『服を脱がすな』『できるだけ触るな』『身体を見せるな』と今まで言われてきたからな……普通はそういうものだと思っていた」

他の娼婦と寝たときのことを、あけすけに話す。本来ならそれはマナー違反だろう。だがアルヤは怒つたりしない。

(震えて泣き叫ぶとか、どんな男でも相手にするだとか、冗談かと思つたけど……エーギル様のこのご様子、本当なんだわ)

そう思うと、なんだかきゅうんと胸が締めつけられて、気づけばアルヤは再びエーギルに唇を

重ねていた。ちゅ、ちゅる、とくりかえし貪つて、糸を伝うほどに舌を絡め合つてから、アルヤはエーギルの頬の傷の撫でながら微笑む。

「少なくともわたくしは、今、エーギル様と肌を合わせたいです。ですから……」

「……ああ、わかつた」

返事とともに、今度はエーギルから口づけられる。同時に背中に手を回されて、リボンの位置を探られた。初めて脱がすドレスに手間取ったのだろうか、最初のほうはたどたどしかつたが、すぐにコツを得てするすると背中の編み上げリボンを抜いていく。彼女は伽のためにコルセットをつけていない。だから背中のリボンを解いてしまえば、すぐには胸元が緩んで彼女の豊かな谷間がふるんと揺れた。胸が露わになつたのに、またエーギルが生唾を呑みこんだ。

その間にアルヤもエーギルの上着を脱がせ、クラバットを解き、シャツブラウスを脱がせにかかりている。すっと胸元の素肌に両手をあてて、シャツを広げるよう肩まで這わせると、エーギルがぴくぴくと震える。しつかりとした筋肉のついた胸板は、触れた瞬間は柔らかかったのに、緊張が走つたせいかごつごつと硬くなつてアルヤは驚く。

「エーギル様……」

二の腕までシャツをずり下ろして、露わになつたエーギルの上半身を見たアルヤはほうつとため息を吐く。筋骨隆々のその肌には、顔と同じく、大きな古傷がいくつもあつた。

「……見苦しいだろう」

「素敵なお身体ですわ」

うつとりとしたアルヤがまたため息を吐き、彼の胸元に唇を寄せる。

「どうか、ご奉仕させてくださいませ」

「ほ、奉仕？」

戸惑いの声をあげたエーギルはしかし、アルヤのすることを遮つたりはしない。それをいいことに、アルヤはそのまま唇を順番に下の方へと這わせていき、ズボンまでたどり着くと、腰の帯を口で咥えて解きにかかつた。

「……っ」

息を呑んだエーギルの股の間で、アルヤは彼のズボンを咥えてずりおろす。勢いよくぶるん、と飛び出した肉棒は、すでに中を穿てそうなくらいに屹立していた。興奮で体温が高くなつているのだろう、ズボンから飛び出したそれはむわっと男の匂いを漂わせて、脈に合わせてぴくんぴくんと揺れている。

（まあ……！）

目を瞠つたアルヤは、そつと竿を両手で包む。今まで見たどの男よりも、目の前にあるそれは大きい。指を精一杯伸ばしても、片手では握りきれず、親指と人差し指がつきようがないほどに太かつた。それを根元からゆつくりと穂先に向かつてしまふ。

「つアルヤ……」

「おいしいですか？」

ちゅう、と先端に口づけて上目遣いを送れば、エーギルははつと息を吐いた。

「貴女がそんなことをする必要は……」

「わたくしがしたいのです」

きゅっと握りこむ力を強くして、上下にさするとエーギルは快樂に耐えかねたように、シーツを握りこんだ。

(まだ大きくなるのね……!?)

しごくたびに熱を孕んだ肉棒は膨らみ、硬くなる。竿の裏側に浮かんだ筋に強く舌を這わせるたびに、エーギルの口から荒い息が漏れた。

(気持ちよさそう……)

ふふ、と内心笑んで、彼女は怒張の根本にある袋に手を触れる。

「そこは」

「こちらも気持ちがいいでしよう?」

「だが……ぐつだ、めだ……」

ふにゅ、と子種の袋を揉みながら、舌を使い、手で肉杭を擦りあげる。びくんびくんと跳ねる竿はますます硬くなつて、きゅうつと袋も強張り、そろそろ彼の限界が近いのをアルヤに伝えた。

「アルヤ、このままじや、出て……くつ」

「んっ」

かっふ、と唇を穂先に寄せて、子種の出口をちろちろと舌で舐めながら両手で握つて上下させれば、いよいよ彼の屹立が強張る。太すぎて口に呴えるのはどうしてもできないが、しごき続けていると、

「ふあ……つ」

(とつても濃いわ……)

うつとりと艶めいた吐息を漏らしながら、熱を放つてなおまだ猛つている肉棒をアルヤはさする。
痙攣に合わせて、二度三度と叩きつけられるその逆りが口から溢れる前に、熱くどろどろの雄の匂いを漂わせた精液をアルヤはこくんこくんと飲み干した。

「ふあ……つ」

(調子に乗りすぎたかしら……)

しゃんとしたアルヤの口元に、手を伸ばしてエーギルが唇のはしを拭う。どうやら白濁が垂れていたらしい。首を振ったエーギルは苦笑いをする。

「いや、気持ちよかつたが……。出てしまつたからな。もう、俺は帰らなくては」

ズボンをずりあげようとした彼の下半身はしかし、まだ猛つて満足していないと訴えかけている。

「お時間がないのですか?」

「いや、今日は明日の朝まであけていた。もしかしたら、と思ってな」「もしかしたら？」

一瞬ためらつたト

「評判の貴女なら、朝までつきあつてくれるのではないかと……」

ため息を吐いたエリギルに、アルヤはきよとんとする

(ひよことして……)

「一晩空いてらっしゃるのでしたら、まだこちらはお元気なようですし、その……わたくしもまだですし……傍にいてくださいませんか？」

「だが、もう一度シてしまつたからな。」

(やつぱり……一度だけだって言つて他の娼婦に断られていらしたのね)

困ったように言つてはいるものの、拒まることを慣れきった様子のエーギルに、アルヤはまた

も胸の奥がきゅうつと鳴る。

（これを言うのは、娼婦らしくないわ、けれど……）

エリギル様のお時間が許すのでしたら、わたくしを朝まで可愛がつて、ござります

て可愛がってくかさいませ」

笑む。

「貴女は……勘違いしそうになるな。俺にだけ、こんな優しいのかと」

「勘違いではありませんわ。その、わたくし」

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

ふと笑んだエーギルは、脱ぎかけたシャツを脱ぎ捨てて、アルヤを押し倒した。そうして胸元の緩んだ彼女のドレスを肩からずらして脱がしながら、彼はアルヤの唇と重ね合わせる。

(あ、さつき、飲んだのに……)

案の定 変な味がしたらしい。
エリギルは眉間に皺を寄せたが
ぐくごと喉を震わせて愉快そう

「苦いものなのだな。こんなものを貴女は飲んでくれたのか」
そう言つてまたすぐに唇を重ね合わせると、ぬろぬろと舌を絡めてその口内に残つた苦味を分け合うように深く吸う。

「ん……ん
んんつ!
」

不意にエーギルの手が乳房に触れて、中央の尖りを指でつまんだ。急な愛撫に驚いて息を荒くしたアルヤに彼は手を止めて、顔をうかがってくる。

「すまない。ここに触れるのは初めてなんだ。痛くはないか?」

「いえ……あ、きもちよくて、びっくりしただけです」

「つそ
うか」

「あ…………ん…………っ」
ぐつと奥歯を嚙んだエーギルは首筋へと舌を這わせ始めた。

曲げた指の背で硬くなつた尖りをこすられると、こり、こりと揺れてピリピリと柔らかな快感をアルヤに伝える。

「貴女の胸は柔らかいな……アルヤ。これはどうだ？」

「ふあつあ、き、もちいい、ですわ……あつ」

唇が胸へと到達し、口に含まれて乳首が甘噛みされる。そのまま尖らせた舌で中央の周りをこねるようになぶられて、アルヤの声は甘くなつていく。

「あつあつ、そんな、は、じめて、だなんて……うそ……あんんつエーギル様……」

腰を跳ねさせながら喘ぎ声が止まらない。緩急をつけて舌で嬲られると、胎の奥に響いて触れられてもいられない秘部から蜜がこぼれた。

「いや、胸に触れるのは初めてだ。だが、こちらは満足してもらえると思う」「……？」

ちゅぱっと音をたてて胸から口を離し、エーギルは腹あたりまでずりおろしていたドレスを一気に下に引き抜いて、アルヤを産まれたままの姿にした。ベッドに横たわり無防備な状態の彼女を見て、エーギルは目元を緩ませる。

「綺麗だ」

穏やかな声音に、どきん、とアルヤの胸が跳ねた。

「ありがとうございます」

(こんなのは、何度も言われ慣れているのに……エーギル様が、かつこいいから……?)

とくとくとうるさい心臓を抑えながらアルヤが答えれば、エーギルは彼女の股に手を差しこんだ。

「あ……！」

「もうぬるぬるだな……アルヤは濡れやすいのか？」

「それは……ひゃあんつ、あつそれ……あつ」

秘部の溝を割るように指を這わせて、にゅうっと蜜をすくう。その指先に触れた肉の芽は、胸への愛撫でもはや潤滑液を必要としないほどに濡れそぼつてている。エーギルの太く熱い肉棒を舐め慰めているときからすでに、彼女の蜜壺は熱く熟れていたのだろう。

「ふあつあ……つあう……つえ、ぎるさま……つあああつ」

指が、ねつとりと肉の芽をこねて虐める。固く膨らんだ快楽の芽は指が左右に動かされるたびに、こりゅ、こりゅ、と動き、親指で潰されるとぬめりで滑つてこすられる。そのたびにきゅんきゅんと中がうねつて奥が切なくなつた。

「あ、えーぎる、さま、も、もう……挿れて、くださいませ。はやく……なか、欲しいです」

愛撫で徐々に開いてきていた股を、意識的にさらに広げてみせたアルヤは、はしたなくも雄をねだる。エーギルに差し出した秘部はぱっくりと口をあけて、ヒクついた割れ目から新たな蜜が垂れるのが丸見えた。誰だって夢中で腰を沈めたくなるそのお誘いに、エーギルは首を振つた。

「まだだ」

「そんな……！」

開き気味だった股をさらに大きく広げさせて、エーギルは彼女の股に顔を寄せる。そうして、指

で虐めていた肉芽を今度は舌で嬲り始めた。

「ひゃあああんんっ！」

同時に指が中に二本入ってきて、ぐちゅぐちゅと入り口すぐの浅いところを責めたてる。身体の大きいエーギルの指は太く、節くれだつた指が一本入つてゐるだけで、細めの男根が挿入されるかのような錯覚を覚えた。しかもそれが実際に器用に動いて、アルヤの蜜壺の感じるところを確実に探りあてる。秘部から漏れる愛液をじゅるじゅると吸いあげながら、舌では肉芽をこね、指は悦いとこころをくりかえし押してくるのだ。おかげでアルヤの口からはひつきりなしに嬌声が漏れる。「あつあつそんな、あつやあ……んんつきもち、よすぎて……だめ、だめです！　え、ぎるさまあ……！」

（舌が大きいから!?）

隘路を狭めて指を締めつけながら、アルヤは絶頂が近いことを悟る。男をイかせるのはアルヤの仕事であつて、奉仕される立場ではない。だから、今まで手淫だけでこんなふうに絶頂させられたことはなかつた。その初めての体験をしようとしている彼女は、肉棒で与えられるのではない刺激に、目をチカチカとさせながら喘ぐ。

「やめ、あああ……つだめ、も、やめ……つ」

「だめだ。俺のを挿れるには、まだ狭い」

言いながらエーギルは、指を三本に増やす。それだけで普通の男根よりも大きく、太い。きっとそれは、娼婦たちに拒まれてきたエーギルが、彼なりに考えた方法なのだろう。秘部へだけ愛撫を

しつかりやり、解れきつてから挿入するのだ。

ぎちぎちになつた蜜壺を指で容赦なく暴かれ、快樂の芽を舌で執拗に虐められて、これ以上の快感に耐えるのはもう無理だつた。

「だめえええええ……つ！」

叫び声とともに、アルヤはぎゅうっとエーギルの指を締めつけて、がくんがくんと胎を揺らしながら絶頂に達した。

「あ、あ、…………は、ああ、あ……」

浅く息を吐きながら、アルヤは絶頂の波を堪えるように受け流す。だがエーギルはそれを許さないかのように、止まつていた指を動かし中をかき混ぜてくる。

「だめついま……あああつ！」

だめ押しの愛撫を受けて、アルヤはがくがくと腰を揺らして痙攣した。長い絶頂がおさまつたところでようやく指をゆつくりと抜いて、エーギルは笑んだ。

「少しはアルヤを乱せたか？」

（ちょっとどころか……！）

息も絶え絶えに呼吸をくりかえすアルヤは、うまく返事できずに、胸を上下させている。

「だが、これで俺のも入るだろう」

エーギルはアルヤの太ももをつかむと、熱い猛りを割れ目に押しつけた。途端に、先ほどまで激しそうな快楽で苦しかつたはずなのに、奥は太いものを求めて再びうねる。

「ん……き、てください……」

「ああ」

甘えた声に応えて、エーギルがぐつと腰を沈める。

「あんっ」

だが、簡単には入つていかない。彼の男根はあまりに太すぎる。

(握つたときに太いとは思つていたけど……彼の言う通り、しつかり解さなきや無理だつたか、も……あつ!?)

すにゅう、と唐突に巨根が侵入してきた。蜜壺をこれ以上ないくらいに広げて、みちみちになつた奥へとさらに進もうと、怒張が胎を押し上げる。

「んああああっ」

「痛いか?」

「ちが、あ……つああああっ」

最奥まで到達して、胎^{はつ}がごつん、とノックされる。だというのに、肉棒は彼女の中に納まりきつていらない。先ほど絶頂したばかりの身体が、太いもので満たされて強すぎる快楽に喘ぐ。

「やはり根元までは無理か……」

はくはくと息をしているアルヤをよそに、エーギルは結合部を見下ろしてそんなことを呟いた。(うそ、これでまだ……!?)

奥まで隙間なくぎちぎちだ。そう思うのに、まだあるという。根元まで呑みこんだら、一体どう

なるのだろう。

そう思つた途端に、広がりきつた蜜壺がうねつた。

「つアルヤ、もう少し緩めてくれ」

「だ、だつて……エーギルさまの……熱くて……あう……う、動いてください。奥を、わたくしの奥を突いて」

本当ならまだ、大きさに慣れていないから静止したまままでいた方がいいのだろう。だが、待ちきれなかつた。

「……ゆつくり、な」

宣言どおり、もどかしいとも思えるほどに、エーギルは腰をゆつくりと動かす。ざるる、と引き抜いては、にゅうつと奥まで挿入しなおしていく。ただそれだけの動作でピストンに工夫も何もないうが、太すぎる男根は彼女のよがるポイントを全部刺激していくうえ、奥にまで到達したところで壁を強く抉られるから、口からは勝手に甘い声が漏れる。

「あ、あ……、え、ぎるさま……あつんんつそこ、あああつ」

「こうか?」

「ひああああ……っ」

奥をグリグリと押されて、胎^{はつ}を揺さぶられる。それがどうしようもなく気持ちがいい。普段なら、いかに客に気持ちよくなつてもらうかなど、計算を頭の中で巡らせるのに、今の彼女にはそんな余裕がない。

「もう、そろそろ……激しくしてもいいな」

宣言とともに、彼の抽送は早くなり始めた。ずるるる、と体内で響いていた音が、水を跳ねさせたちゅどんちゅどんという音に切り替わる。

「あつえぎ、あああ……つきもちい、い、えぎるさま、きもちい、ですか？ ふああ……つ」

「つああ」

途端にピストンはさらに激しくなり、アルヤの太ももが高く持ちあげられてばちゅばちゅと強く腰が打ちつけられる。

「ひあつあつ……んあつあつはげし……あんんつ」

いつのまにか肉棒は根本までしつかり彼女の中に侵入していた。肉を抉り、泡立った愛液が二人の間で跳ねてずりゅずりゅと滑る。ベッドは軋んで激しく揺れているが、彼らはもうそんな音も耳に入らず、ただ二人の息遣いと喘ぎ声ばかりに集中していた。

「えーぎ、るさま……はだを、くつつけ、て……あつやつ」

「貴女を……潰すから、だめだ」

そう言う彼は、上半身を起こしたままアルヤを突き上げている。

「んつ」

エーギルの拒絶にもかかわらず、アルヤはまるで恋人に甘えるかのように両腕を彼に向かつて伸ばした。

「つ貴女は……また……つ」

その腕をつかんで引っ張ると、勢いよくアルヤの身体を起こし、エーギルは繫がつたまま彼女を自らの膝の上に乗せる。対面に座った状態で抱きしめる体勢だ。

「ひゃんつこれ、あつつ、よ……つ」

「これで触れられるだろう」

背に腕を回したエーギルは、言いながら突き上げを再開する。先ほどと違つて根本までは入らないが、この姿勢は角度が変わつて別の場所を抉^{えぐ}られる。そして体重が乗るせいで、より強く胎^{はら}がノックされた。

「んう……つ、ああつえぎ、るさまあああつ」

ぎゅうっと抱き着いてアルヤは必死に叫ぶ。エーギルが『潰す』と言つたように、対面ですら抱き着けば彼の豊満な大胸筋に埋もれてしまいそうだ。だが、行為で汁ばんだその肌が愛おしい。

「は、あ、きもち、い……ま、またあああ……ついく……んんつあああつ」

「く……つアルヤ、俺も……！」

ばちゅんばちゅんと激しく突かれて、アルヤは背をのけぞらせた。

「んあああああ……つ」

ぎゅううつと蜜壺がうねり、がくんと搾り取るリズムに合わせて、熱い迸りが勢いよく奥に叩きつけられる。

「あ……う、んん……」

どぶ、どぶ、と何度も痙攣しながら吐き出された白濁は、アルヤの胎^{はら}に広がっている。栓をして

いる肉杭は、熱を放つたがやはりまだ足りないらしい、今すぐピストンを再開するにはやや硬さに欠けるものの、太さを保っている。

「はあ……」

絶頂のおさまったアルヤは、こてん、とエーギルの胸に頭を預けて、そのまま荒い呼吸を吐く。鼻先には彼の汗のにおいが刺激して、また奥が揺れた。

(エーギル様、こんなにお元気なのに、今まで一回で済ませていたなんて……さぞお辛かつたでしようには)

彼を哀れに思えば、またも胎^{はら}がうねって、胸がきゅうっと詰まった。

「アルヤ、そんなふうに締めつけられると……」

ぐつと眉間に皺を寄せたエーギルが、彼女の身体を離そうと、そつと肩に触れる。だが、逆に彼女は抱き着いた腕にきゅっと力をこめて、エーギルの胸に頭を預けたまま上目遣いで彼を見つめた。

「まだ……満足なさつてらっしゃらないのでは？」

快樂に耐えかね、涙をこぼした彼女の瞳は潤んでいる。柔らかくも滑らかな肌はしつとりと汗を帯び、彼女の甘い香りを漂わせていて酷く情欲をそそる。大きな胸を押しつけての美女のお誘いを、断れる男などいないだろう。

「本当に……俺を最後まで相手してくれるのだな」

言いながらエーギルは、アルヤに唇を落とす。それは続縁の行為を始めるという答えだつた。

その夜、空が白むままでずっと、アルヤの部屋からは嬌声が響いていた。エーギルが寝かす暇を与

えず、吹つ切れたように彼女を抱いていたせいで。よがり狂い、胎^{はら}がエーギルの子種でいっぱいになつてなお、何度も突き上げられて、アルヤは文字通り朝まで抱きつぶされたのだった。

翌朝になつて、エーギルは身支度を整えながらアルヤを振り返つた。彼女は一晩中責め立てられ、後ろから突かれたり自ら上に乗つたりと激しすぎたため、今は足腰が立たずベッドに寝そべつたままだ。本来なら娼婦は部屋の外まで客を見送るのが慣習なのに、今朝はどう考えても無理だった。

(わたくし、足腰はけつこう丈夫な方だと思っていたのだけれど……エーギル様は凄いわ……)

だが、彼が身支度をする背中を見ていると、あのたくましい腕が自分の身体を暴いたのだと想い出し、奥が疼^{うず}く。

(あんなに抱かれたのに、まだ足りないのかしら。でも……)

しょせんは一夜の夢である。

(見た目も中身も、とっても素敵な方だと思うけれど……大金を積んだとおっしゃられていたし、もう来られないかもしれないわ)

そんなことを思いながら、彼の姿を目に焼きつけるようにアルヤは見つめる。身支度を終えたエーギルは大股でベッドに近づくと、ベッド前に跪いて、昨日と同じようにアルヤと目線を合われた。

「アルヤ。その……無理をさせてすまなかつた」

横になつたままのアルヤに全く怒りもせず、エーギルは劳わるようになつて彼女の手をとる。

「いいえ。エーギル様は満足されましたか？」

尋ねにして彼は苦笑した。

「実のところ、まだ、貴女を抱き足りない」

（うそ、あんなにして……!? 絶倫つて彼のことを言うのね！）

「だから、今夜もまたここに来てもいいだろうか」

「え……」

仕事の顔も忘れて、アルヤはぽかんとする。

彼女の予約は、連日埋まつてゐる。だというのに、同じ男が二日連続で彼女を買えるわけがない。できたとして、それはどんな金を積んで間入りをする必要があるだろう。加えて、ここは普通の娼館とは違うのだから、コネだつて必要だ。

「だめだらうか……」

「いえ、わたくし、またエーギル様にお会いできなかつて思つてました。嬉しいです」

本音が滑つて口から出て、アルヤは自分でどきりとしたが、構わず微笑んだ。少しだけ緊張を滲ませていた彼も、アルヤにつられたようにほんのりと顔を緩ませる。

「……そうか。では、今夜も貴女を一人占めさせて欲しい」

「はい」

返事には指先への口づけで返される。

（そんなこと無理かもしれないけれど……）

ちよつぴり残念に思いながらも、エーギルもまた、娼婦に対するリップサービスを言つてゐるのだろうと思ひこむことにして、アルヤは微笑んでみせる。

（そうなつたら、いいわ……）

ほのかに淡い期待を胸に、アルヤは部屋から出て行くエーギルを見送つた。

いつものアルヤは昼間には部屋の外に出て、許された範囲内で街の散策を楽しんだりもしている。だが、エーギルと過ごしたあの今日に限つては、部屋に引きこもりほとんどを寝て過ごした。朝方まで抱かれていたのだから仕方のないこととはいへ、どうにも足腰がだるくて立ち上がりれない。娼婦として日々組み敷かれるのには慣れている彼女が、こうも体力を削られたのは、ひとえにエーギルの責めが激しかつたせいだろう。

（昨夜は、夢のようだつたわ）

昼をすいぶんと過ぎてから湯あみをし、ベッドを整えて軽食をとつたら、もうそれだけで客をとる時間が近い。この日の彼女は、ベッドと食事の世話をしてくれたト女以外とは会話をすることもなかつた。しかし夢見心地で浮ついていた気持ちも、日が落ちるころになつてようやくしあきり

してきた。

（今夜はどなただつたかしら……）

いつものように部屋のソファに身を預けて、アルヤは娼館前の通りをぼんやりと見る。昼間はほとんど人通りのないこの娼館の周りだが、夕暮れどきともなるとにわかに人で賑わっている。その歩く人の中に、見覚えのある背格好の男を見つけて、アルヤはぽかんとした。

「うそ……」

思わず立ち上がり窓に顔を近づければ、どうにも見間違いではない。むしろ人波の中で頭一つ抜けた彼を見間違えようはずもなかつた。彼は、アルヤのいる娼館に入つてくる。

（本当に……？）

高鳴る胸を抑えながら、それでもアルヤは高級娼婦の顔で悠然とソファに身体を預けなおした。表面上は取り繕つてゐるが、予想外のこと内心はふわふわとしている。開店にはまだ少し早いが、多少は問題ないだらう。

落ち着かない気持ちのままアルヤは待つ。だが、受付を済ませたであろう時間が過ぎても、部屋のドアはノックされなかつた。支払いに手間取つたとしても、ずいぶんと遅い。

（……人違い、だつたのかしら）

ドアを見つめていたアルヤの胸には、先ほど湧き上がつた喜びが嘘のように、じわじわと憂いが沁みこんでくる。

（ううん……。そうよ、いくらなんでも、一日連續で、なんてそんなこと……）

あるわけがない。その最後の一言を思い浮かべることさえできなかつたが、アルヤはふう、と息を吐いてゆつくりと首を振つた。たつたそれだけの動作で、彼女は浮かんでいた期待と落胆を振り切る。

（わたくしは、ただの娼婦だわ）

そう心の中で呟くと、アルヤは再び窓の外に目を向けた。その横顔にも瞳にも、一見して憂いなど微塵も浮かんでいない。すでに普段通りの彼女である。

夕日に照らされていた道は徐々に暗くなり、店先に灯されたランプでうすぼんやりと道行く人が浮かびあがる。そんな時間になつて、いつもと同じ娼館の営業が始まつた。

ソファで客を待つアルヤの見た目は完璧な貴族令嬢の居づまいだ。だというのに、そのドレスを一枚剥げば、ドロワーズもコルセットも身に着けていない、いやらしい娼婦の身体である。見た目通りの令嬢ならいざ知らず、娼婦である彼女が淡い想いに身を焦がすことは許されないので。

（今日はあと一刻は待つかしらね）

記憶にある予約客だとしたら、そうなるだろう。だがその予想に反して、それからいくばくもせずにドアのノック音が響いた。今日も、いつもに比べたら客が来る時間にはずいぶんと早い。

「どうぞ、お入りになつて」

返事に応じて、店の男が入つてきた。昨日とは、違う。

（……やっぱりエーギル様じや、なかつた……）

「アルヤさん、お客様をお連れしました」

案内してきた男がドアの前から避けると、その影から客が現れる。ぬうつと、身を屈めて入つてきた男の姿に、アルヤはぽかんとした。

「エーギル様……？」

「ではごゆつくり」

店の男は定常通りのセリフを告げて、エーギルを残すとドアを閉めて出て行つてしまつた。ランプにぼんやりと照らされたエーギルは、ドアとソファとで離れていてもわかるほどに、渋面を作つている。

「本当に、いらつしやつたんですね」

アルヤが言い、ソファから立ち上がりつてエーギルに近寄る。そうしてそつと手をとると、エーギルはなぜか眉間の皺を深めた。

「……ああ」

「さあ、こちらにいらして」

まずは会話を楽しもうと、アルヤはエーギルをソファへと導く。引かれるままに彼はついてきたが、まだしかめ面のままだ。

「今夜も来て下さるなんて、嬉しいです」

「……そうか？」

「エーギル様？」

ソファに座る直前に、アルヤは彼を見上げてどきりとする。渋面に見えていたエーギルは、困惑

したふうだつた。

「……迷惑では、なかつたか？」

顔を歪めてのその問ひに、アルヤは昨晩何度も感じた、胸がきゅうっと締めつけられる感覚に陥る。

（エーギル様つたら、わたくしの言葉を娼婦の社交辞令だと思つたのね。それは、間違つてないのかもしれないけれど……）

アルヤはふるふると首を振つて意志を伝えてから、エーギルの手を引いてソファに座らせる。そのうえで、大胆にも彼の膝の上に横むきに乗り上げた。彼の太ももは厚いから、通常よりもずいぶんと床から高い。この状態なら、立つてゐるよりかは目線が合いやすい。

「……っ？」

驚きで両腕を浮かせたエーギルに、アルヤは悪戯っぽく笑いかけた。

「酷い方だわ。わたくし、心待ちにしておりましたのに」

「だが」

「だからさつき、ちょっとぴりがつかりしたんですの」

「なに」

腕の置きどころに惑つて手をさまよわせたままのエーギルが、びくんと止まつた。

「昨日のエーギル様は、お部屋に入られるとき、店の者より先に入られていたでしよう？ だから今夜は別の方が来られたんだつて一瞬勘違いしましたのよ？」

「……娼館に通うなら、ルールを守れと叱られてな」

定常なら店の男に招き入れられるまで娼婦の部屋に入るべきでない。どうやらそのルールを守るよう^に小言を言われたらしい。金も腕力も圧倒的に上であろうエーギルが叱られて渋面を作りながらも従つたのかと思うと、アルヤは笑みがこぼれた。

「あら……ふふ。そうですね、ルールは守つてくださいませんと、わたくしも困つてしまいますが」

「その様子なら、今朝の言葉は社交辞令ではなかつたようだな」

「まだ疑つてらっしゃるなんて。わたくしが何を申しあげたら信じてくださるのかしら?」

くすくすと笑いながら、アルヤは未だに宙でさまよつていたエーギルの腕をそつと触れて引き寄せ。そうして掌に口づけを落として上目遣いで視線を送つた。その瞬間に、アルヤの太ももに、ずくりと熱源が押し当てられる。

(もう興奮してらっしゃるの?)

自然と目元が緩んで、アルヤは頭をエーギルの胸に預けながら、彼の手を自分の頬に当てる。

「エーギル様。口づけてくださいませんか?」

「……ああ」

答えたエーギルの唇がゆつくりと近づいてくる。膝の上に乗つていてさえまだ遠い顔を、彼は身を屈めて近づけてくれるのだ。エーギルがアルヤを見つめるその瞳は、昨夜も見せたような戸惑いの色を浮かべている。

(本当に、可愛らしい方)

その唇を受けながら、アルヤは頬に当たたエーギルの手をすりすりと撫でる。その動作で、太ももに当たつているものの硬度が増したようだつた。

「ん……」

軽く重ね合わせて離されたのを、すぐに追いかけて彼の唇をはむ。もつたいぶるよう柔らかに下唇を甘噛みして、わざとリップ音をたてて口を離しながら、アルヤは至近距離にあるエーギルの赤い瞳を見た。たつたそれだけの触れあいで、彼の瞳はすでに情欲の色に染まっている。

(あ。くる……)

「アルヤ」

低い声が耳をくすぐつて、すかさず唇が重なつた。先ほどは触れるだけだつたのに、今度は噛みつくようにアルヤの唇を吸つてくる。貪るようなリップ音をたてながらエーギルは幾度もアルヤの唇を奪つた。

火が灯つたように口づけるエーギルは、必死でアルヤを求めている。そんな彼の様子に、アルヤは内心ほつとした。

(エーギル様は、言葉だけじゃなく身体でも示したほうがいいんだわ)

頬に添えられていただけの手が、彼女の顔を逃がすまいと力が籠る。そのエーギルの手を安心させるようにすりすりと撫でてやれば、唇を割つて入つてきた舌がアルヤの口内を犯した。熱い舌に積極的に応えると、エーギルはますます舌を貪る。

(ん……んう……)

息をつく間もなく口を吸い合い、唇の紅がすっかり落ちたころになつて、ようやくエーギルはアルヤの唇を解放した。

「……アルヤ」

眉尻を下げたエーギルが、助けを求めるような声を出す。その理由はわかりきつていた。アルヤの太ももに当たった熱源は、今にもはちきれそうだ。

「どうなさりたいんです？ おっしゃってください」

首に腕を回しながらアルヤが尋ねたときには、エーギルの腕は彼女の背に伸びて、ドレスのリボンに手をかけている。

「抱いてもいいか」

「もちろんです」

ふふ、と笑つてアルヤが応えると、ほつとしたようなエーギルが、彼女のリボンを解き始めた。だが、半ばまで解いたところで胸元が緩んだのを見た彼は、もどかしそうにすぐスカートをたくしあげる。ドレスを脱がす時間も待てないらしい。昨夜はゆっくりと、なんて言つたアルヤも今夜はそれを止めず、彼の求めるままに腰を浮かせて秘部を触りやすいように腰を浮かせた。ドロワーズを穿いていない無防備な蜜口に指が侵入して、あつという間にどろどろに解される。

「エーギル様、もう……」

「まだ少し硬いだろう。少し待つてくれ」

彼の手淫でぐずぐずになつた身体を持て余し、挿入をねだればエーギルは生真面目な顔で断る。

もう彼の怒張は張り詰めていてつらいだろうに、それを我慢してアルヤを解そうとしているのだ。
「貴女に痛い思いをさせたくない」

「あう……つ」

囁かれた低い声と同時に、指が奥を揺らしてきゅうっと胸と胎^{はら}が揺れる。女を口説くためのボーズでなく、本心からそう言ってくれているのだろう。

(どうしてエーギル様はこんなに、わたくしに真摯に向き合つてくださるのかしら)

国営の娼館だから、もともと変な客は来ない。そうはいつても、娼婦相手であることへの侮りは、どの客にもあつた。

エーギルからはそれが感じられない。目線を合わせ、彼女の身体を労わりながら、二人で気持ちよくなろうとしてくれる。

身体を襲う快楽の波に声をあげながらも、エーギルの真意を読み取ろうと赤い瞳を見つめるが、ただただ彼が必死なことしかわからない。ぎらぎらと熱情を灯しながらも、指尖が纖細に動いているのが可愛かつた。

「もう、いいか？」

「もちろんですわ」

横座りだったアルヤはエーギルの膝に跨りなおし、一人して服を脱ぐ手間も惜しんすぐに入浴した。ぐちゅつと奥まで突き上げられたら、すぐにゆすゆすと中を抉つて搖さぶられる。

「ん、あ……つそこ、きもち、い……あ……」

対面で抱き合いながら性器だけを露出させて交わるのは、いかにも余裕がない。いつもならソファで始めたとしてもつとゆっくり時間をかけて相手を焦らすのだが、エーギルの求めがあまりにも可愛くて、アルヤも我慢ができなかつたのだ。

(エーギル様とするのは、不思議だわ)

ぎつぎつとソファを揺らし、嬌声を漏らしながら頭のどこかで考える。こんなふうに彼女が上に乗つてているのだから、他の客ならアルヤが腰を振るところなのに、エーギルは下から突き上げて、アルヤを貪りつつも彼女への奉仕をしている。

これではどちらが客なのかわからない。

「はあん……つイ、つちや……あんんつ」

「……つアル、ヤ……」

ずんつと深く抉られて、うねつた蜜壺がエーギルをぎちぎちと締めあげる。昨晚ならばそれだけでエーギルも達していただろうが、締めつけを受けながらも彼はまだ腰を揺すぶつていた。

(ふわふわして……考えられなくなつちやう……)

「んつんう」

絶頂に至つて背をしならせたアルヤの身体を、エーギルの腕が支えてくれる。彼はそのまま背中を丸めて彼女の首筋に唇を押し当ててきた。性急にまぐわっているのにその口づけは酷く優しくて、余計にアルヤは乱れてしまう。

「……そろそろ……出す、ぞ」

「来て……んあつ……熱いの、あつあんんつ」

腰をぎゅつと抱き締めた途端に、股を貫く肉棒がびくんと震える。昨晚だつて何度も吐き出したにもかかわらず、勢いの衰えない子種がアルヤの最奥にびゅうびゅうと激しく注ぎこまれた。しかし、昨晩と同様に満足しきつていらない男根はまだ硬い。

「アルヤ、もつと……」

(もつとシてください……)

射精したばかりでそのまま突き上げを再開したエーギルのおかげで、アルヤの返事は嬌声で紡がれることはなかつた。だが、繋がつた身体は蜜壺のうねりで続きを求める気持ちをエーギルに伝えてくれる。二人は引き続き子種と愛液の混ざつた水音を激しく響かせた。

そうしてソファの上でのまぐわいのあとも、まだ行為は終わらない。ベッドに移りドレスを脱がされてからも身体を貪られ、アルヤはひたすらに喘がされる。エーギルが三度目に果てたあとは、すぐに次の行為を始めず横向きで寝そべっていたが、口づけを交わしているうちにまたすぐに彼の下半身が欲を訴え始めた。

二度目以降はずいぶん時間をかけてまぐわっていたものの、夕方すぐから行為が始まつたからまだまだ夜更けというには早い。その証拠に、近くの部屋からはまだ別の娼婦の嬌声やベッドを揺らす音がかすかに漏れ聞こえてくる。これからさらに情事を重ねても問題ないだろう。

(昨日もあんなにシて、今日もシてるのに……エーギル様は本当に元気だわ)

くすくすと笑いながらアルヤはエーギルの男根に指を沿わせて、先端をくちゅくちゅと弄る。そ

こは先走りなのか先ほど吐き出した白濁の残滓なのか、あるいはアルヤの蜜なのかわからないものでどろどろだ。びくびくと身体を震わせながら快感に喘いだのか、エーギルは眉間にわずかに皺を寄せる。

(……気持ちよさそう)

「アルヤ」

「今度はわたくしが上に乗つても?」

「つ……いや」

息を呑んだエーギルは、一瞬唇を噛んでから、そつとアルヤの手を押しとどめる。

「昨夜も今日も、少し……貴女を貪りすぎた。今夜はここまでにしておこう」

(こんなにお元気なのに、わたくしを気遣つてくださるなんて。優しい方だわ)

「……わかりましたわ、エーギル様。では、またわたくしに会いに、ここへ来てくださいますか?」エーギルの肉棒を弄つていた手を彼の胸に当てて、アルヤはねだる。それは言葉だけ捉えれば娼婦としてのいつも通りのセリフにすぎない。だが。

(どうしてかしら。わたくし、エーギル様に期待しているわ)

アルヤとエーギルは所詮、娼婦と客の関係でしかない。昨夜も今夜も、無茶な横入りをしている

彼は、きっともう金がないに違いない。なのに、あるいは、と思ってしまうのだ。

(昨日会つたばかりなのに)

もつと会いたいと願つている。

その気持ちを、娼婦らしくないと思いながらもアルヤは口にした。けれど、対する答えは残酷だ。「いや。もう、ここには来ない」

「……あ」

思わず小さく声をあげて、アルヤはすぐに次の言葉を探した。

「そう……です、か。寂しいですわ」

わかっていたはずの答えが、やけに胸に刺さる。

(娼婦相手なんだから、嘘を言つてくださつてもいいのに。エーギル様は、眞面目な方なのね)

溢れそうになつた涙をこらえて、アルヤはかろうじて微笑んでみせる。

「ああ。それで、貴女がよければなんだが」

「……」

「俺に身請けされてくれないか」

真摯に見つめる赤い瞳が、嘘を言つているように見えない。だというのに、アルヤはぽかんとしてその言葉を反芻し、顔を歪めた。

「……いくらなんでも、それは酷い冗談ですわ」

(わたくしを、身請けできるはずないのに)

彼女の身にかけられた身代金は、一生かかつても払いきれないほどの大金だ。アルヤの客はほとんどが貴族だが、どんな高位の貴族が来たときだって、冗談でもこんなことを言い出さなかつた。身請けだなんて非現実的なことを言い出すのは、互いにリップサービスだとわかる間柄だけだろう。

そう。きっとエーギルも、リップサービスを言っているのだ。昨日の言葉は嘘じやなかつたが、今日はそうじやなかつた。

(……だめね。わたくし)

笑つて受け流せばいいのだろう。『迎えに来てくださるのを待つていますわ』と嬉しそうに微笑めばいいのだと頭ではわかっている。けれども今のアルヤにはそれができなかつた。

(なんでこんなに胸が痛いのかしら)

「冗談ではない」

赤い瞳を見つめていられなくて視線を逸らしたアルヤに、きっとばりとした否定が返ってきた。

「貴女が了承するなら構わないと、もう話をつけてある。金のことなら問題ない」

弾かれたように顔をあげたアルヤと彼の視線が再び交わる。エーギルは、変わらずまっすぐに彼女を見つめていた。

昨日出会つてから今まで、エーギルはずつと歯に衣着せぬ物言いしかしない。アルヤはこの娼婦の暮らしを続けてきて、男の嘘はなんとなくわかるようになった。だが、今のエーギルは嘘をついでいるようには見えない。加えて店に入つてきてからアルヤの部屋に来るまでに時間がかかったのは、その話をしていたからなのだと言われば、納得もできよう。

身請けなんてありえないとわかつているのに、彼の言葉も態度も、全てが嘘ではないとアルヤに訴えかけてくる。

「……本当、なのですね……？」

「ああ。……どうだろうか。貴女は、俺なんかに身請けされるのは、嫌か？」

するりとエーギルがアルヤの頬を撫でた。懇願するように細められた彼の目に、先ほどとは違つた意味で胸が痛くなる。

(これが、一晩の夢でも、いいわ)

目を伏せたアルヤは、ふるふると首を振つて、微笑んだ。

「嬉しいです、エーギル様」

そつとエーギルの手に自らのものを重ね合わせて、アルヤは心からそう返事をした。

翌朝目覚めたアルヤは、寝る直前のエーギルの話がリップサービスなどではないことを実感することになつた。どうやらアルヤが寝入つたあとに、彼女の返事を店の者にエーギルが伝えたらしく、下女によつてすつかり旅支度が整えられていたのだ。と言つても、数日分の着替えや最低限の必需品のみを鞄に詰めただけのものである。これは客から贈られた数々のドレス全てを持つて移動するのは現実的ではなく、ほとんどを娼館に残すためだ。

いつも身の回りの世話を担当している下女に最後の身支度を手伝つてもらつたアルヤは、娼館の店主に会いに行つた。そして、アルヤが真実、エーギルに身請けされるのだと説明を受ける。店主の部屋から出たアルヤを待つていたのは、エーギルだった。彼女が部屋から出てきたのを見て、

エスコートのためか、そつと身体を屈めて手を差し出してくる。

(……この娼館から自由になる日はないと思っていたけれど……)

店主の部屋を振り返らず、アルヤは一步踏み出してエーギルの手を取る。

「アルヤ。貴女に謝らねばならないことがある」

エスコートで歩き始めたエーギルが、ごく真剣な声音で言い出した。

「どうかなさいまして？」

「すまない。これから貴女には俺とともに馬に乗つて移動してもらいたいんだ。俺が馬車で来ていればよかつたんだが……ここに来るときは誰かを連れて帰る予定なんてなかつたから」

あけすけに『ただ娼婦を抱きに来ただけだつた』と告白されてアルヤはくすくすと笑つてしまふ。それは裏を返すと、たつた一晩でアルヤをどんな手を使つても手に入れたいと熱をあげてくれたという意味だろう。そう思えば、アルヤは胸のあたりがフワフワとするような気がした。

「……気を悪くしたか？」

「いいえ。そんなはずありませんわ。わたくし、ずっと乗馬というのをしてみたかつたんですの」「そうか……」

アルヤの言葉にあからさまにほつとした様子のエーギルに、彼女はまたもくすぐすと笑う。そんな会話を交わしながら歩いて、あと一步踏み出した先は、娼館の外だ。これまで何度もこの建物の外には出たことがあるが、今日のその一步は、今までと全く意味が違う。

「馬に乗つていけるなんて嬉しいですわ」

そつと一步を踏み出せば、明るい朝日に満ちた通りに出る。その日光の眩しさに目を細めて、アルヤは自然と口元を笑ませた。じわじわと現実感を伴つてきてはいるものの、アルヤは未だ夢の中にいるような気持ちだ。

「ならよかつた」

短く答えたエーギルもまた、穏やかな笑みで答える。そうして外を見たエーギルは、何かに気づいたように視線を向けた。

「ああ、もう馬に荷物を積んでくれたのか」

娼館を出てすぐのところで、一頭の馬を連れている店の男に声をかける。

(……まあ！)

その馬を目にしたアルヤは目を瞠みはつた。

つやつやとした毛並みは全て黒く、大きな筋肉の浮いた立派な身体は、これまで目にしたどの馬よりも大きい。その馬にアルヤの荷物と思しき鞆が括りつけられているが、その小さくはないはずの鞆が小さく見えるほどに、馬は大きかつた。

「立派な馬ですね！」

「ああ。軍馬の中でも品種の違う馬でな。俺を乗せるのに普通の馬では小さすぎる」

「そうなんですね。あの……不躾かとは思うんですが、触れてみてもよろしいですか？」

「……怖くないのか？」

驚いたようなエーギルに、アルヤが首を傾げると、彼はまた穏やかに笑んでエスコートの手を離

した。

「いや、なんでもない。ぜひ触つてやつてくれ。首のあたりを撫でてやると喜ぶ」「わかりました。お名前は？」

「スヴァルトだ」

「ありがとうございます」

アルヤが近づけば、黒馬は彼女を品定めするように鼻先を近づけてきた。アルヤが「はじめまして」と声をかけると、スヴァルトはひくひくと鼻を動かしたあとに、彼女の肩あたりに頭をこすりつけた。甘えたようなその動作に驚きながらも、アルヤはスヴァルトの首筋を撫でてやる。

「わたくしは重いかもしれないけれど、これからお世話になりますわ、スヴァルト」

「貴女は羽のように軽いだろう」

笑いを含んだ声に振り向こうとしたときには、アルヤの身体は宙に浮いている。ふわっと抱えあげられて、降ろされたかと思えば、もうそこは馬上だ。

「ほら、軽い」

「エーギル様」

急に持ち上げるなんて、と言おうとしたアルヤは、はた、とその視線の高さに気づいた。スヴァルトの背に横座りの形で乗せられていると、さすがにエーギルよりも目線が高い。その彼の肩越しに、店主やアルヤつきの下女が見送りのために出てきているのが目に入った。彼女の視線が動いたのにつられたらしいエーギルが後ろを振り返つて、「ああ」と声をあげる。

「では店主、世話になつた」

店主が無言で頭を下げたのを見ると、エーギルはひらりと馬に跨またがつて、アルヤを背中から支えた。先ほど部屋を出るときに挨拶を済ませているからか、下女からも店主からも一人に対して特に言葉はない。目が合つた下女は、目に涙を浮かべているものの微笑んでいて、いつもアルヤのことを気遣つてくれた彼女らしい見送りである。

この店主は娼館の経営者に雇われているにすぎないが、金にがめつい彼はいつだって娼婦たちに効率よく稼がせようとしていた。アルヤはこの店で一番の稼ぎ手だったため、彼女目当てにここにやってきて、それが叶わず他の娼婦と夜を過ごす男も少なくなかつたはずだ。彼女はいるだけでこの娼館に金を産んでいたのである。そんなアルヤがいなくなるのは相当な痛手だろう。

だというのに、アルヤはエーギルの元への身請けが決まったのだ。先ほど店主と話したときもまだ信じがたかつたが、むつりと黙りこんで不機嫌そうな店主の顔や、泣きそうな下女の顔、旅支度の整つたこの状況全てが、夢などではないことをじわじわとアルヤに思い知らせる。

（わたくし……本当に、エーギル様に身請けされるんだわ）

手綱を持つたエーギルの腕の間に挟まれて、アルヤは下女に微笑んでみせた。ここを離れることになつて、アルヤの世話をしてくれていた下女のこととは少し心配だったが、荷物に詰め切れなかつたドレスや装飾品類については、彼女に下げ渡すことを伝えてある。高級品ばかりなので、下女にとっては大いに助けになるだろう。

「アルヤ……いいか？」

その確認は、『出発してもいいか』という問い合わせであるのだろうし、きっと『アルヤを身請けしても本当にいいか』という問い合わせもあるのだろう。

「ええ」

短く答えてから、アルヤはきゅ、とエーギルの服をつまむ。

「わたくしを、連れていくつてください」

「……ああ」

頭を預けたアルヤに、エーギルは応えて馬を歩かせ始める。馬が進むにつれ、彼女の視界から見慣れた娼館がやがて遠ざかってゆき、店主が店に入していくのが目に入る。下女は小さくなりゆくアルヤたちをいつまでも見送っていた。

（見たことのない、街）

スヴァルトの足は止まることなく進み、やがて娼館の影すらも見えない、アルヤが足を踏み入れたことのない場所へと彼女を運んでいく。

そうしてこの日、アルヤは何年も過ごした娼館をあとにしたのであった。

二章・二人きりの旅路

アルヤたちが娼館を発つて半日後、夜更け近くになつてようやく隣の街へとたどり着いた彼らは、宿屋で泊まる部屋に困っているところだつた。比較的大きな街だから宿屋は多いはずだが、それだけ宿泊客も多いのだろう。夜ともなればほとんどが埋まつていて、今は寝床を求めて三件目だつた。路銀を持たないアルヤの代わりに、宿の交渉をしているのはエーギルである。その彼は今、店主と話しながら難しい顔をしていたが、やがて頷いた。

「……わかった。それで頼む」

前払いを清算を済ませると、エーギルは後ろで待っていたアルヤを振り返る。

「待たせてすまない」

「どんでもありませんわ」

夕飯をすでに軽く済ませていた彼らは、もうベッドに潜りこんで眠るだけだ。今夜は湯あみができるいないが、もともと旅路の中では濡らした手拭いで身体を拭き清める程度なのが普通である。今日に限つては出かける前に湯あみをしているから、夜が遅いこともあり、手ぬぐいでの拭き清めも省略することを先にエーギルから謝られていた。

店主から鍵とランプを受け取ったエーギルは、荷物を持ってアルヤを先導する。

(悩んでらっしゃる様子だつたけれど、どうされたのかしら?)

階段についてあがりながら、内心首を傾げたアルヤだつたが、客室に入つてすぐにエーギルの苦惱の理由がわかつた。部屋の中はいたつて簡素だ。通りに面した窓があつて、机もなく、家具は椅子とベッドだけである。問題はそれが一台だけで、どう見ても一人用のサイズだということだろう。「荷物とランプをベッドの傍に下ろしながら、エーギルはアルヤを振り返る。「ベッドが一つの部屋しか空いてなかつたから、貴女がベッドで寝てくれ」

「エーギル様はどうなさるんです?」

「俺は椅子か、床ででも」

「だめです」

エーギルの言葉を遮つたアルヤは、ベッドに近づく。それは成人男性が横になるには充分なサイズだろうが、二人で寝るにはいささか狭い。

(だから迷つてらしたのね。でも)

「エーギル様は今日一日ずっとスヴァルトの手綱を操つてらしたもの。明日もでしよう? きちんとベッドで休まれませんと。床か椅子に寝るべきなのはわたくしですわ」

「そんなのはダメだ!」

慌てたように反論されて、アルヤはそこでほんのりと微笑んだ。

(本当に 優しい方ね)

エーギルの反応がわかっていたアルヤは、内心でくすくすと笑いながら、次の提案をする。

「では、わたくしと一緒にベッドで寝ましよう?」

「だが俺が一緒だと狭いだろう。それでは貴女が」

「エーギル様」

そつと彼に身体を寄せて、首を傾げながらアルヤは彼を見上げる。

「わたくしと添い寝るのはおいやですか?」

その視線に、エーギルは息を呑んでぎゅっと眉間に皺を寄せた。だが、すぐに諦めたように息を吐くと、彼女の肩にそつと触れて苦く笑つてみせる。

「いやじゃないから困るんだろう」

「それはよかったです」

ふふふ、と笑つてアルヤはベッドに腰かけた。

「どちらも床で寝るのは承知できないんですけど。一緒にベッドで寝たほうがいいに決まっています」

「それでは貴女が休まらないと思うが……」

「押し問答は終わりです。さあ、エーギル様もこちらにいらして?」

アルヤが手を伸ばせば、エーギルはやつと諦めたように外套を脱いで椅子へと放り、ベッドへと座つた。彼が靴紐をほどき始めたのを見て、アルヤも倣い外套と靴を脱ぐ。彼は旅先では寝間着に着替える習慣はないらしい。上着を脱いだ軽装になると、エーギルはそのまま布団を剥いでベッドに寝そべつた。その隣で、アルヤはまだ横にならないでドレスのリボンに手をかけ始める。